

インタビュー

現実の課題解決に加え、将来のNTTグループの経営に直結するR&D成果の提供に注力

ネットワーク技術からプラットフォーム、サービスインテグレーション、環境エネルギーまで、NTTグループの情報流通ネットワークサービスの創出に関するR&D活動を展開するNTT情報流通基盤総合研究所。実用化研究を通してNTTグループの事業への貢献を目指すNTT情報流通基盤総合研究所におけるR&Dの方向性、重点施策などについて、三宅功所長にうかがった。

NTTグループの経営に直結するR&D成果を提供

——ネットワーク技術を中心に、環境エネルギー・防災分野まで、情報流通ネットワークサービスの基盤領域のR&D活動を推進されていますが、R&Dの方向性を含め最近の取組み状況からお聞かせください。

三宅 私ども情報流通基盤総合研究所は5つの研究所から構成されています。NTTグループの情報流通ネットワークサービスの創出に貢献することを第一義に、R&D活動を展開しています。企業の研究所ですから、経営に直結するR&D成果を提

供し続けることが主要ミッションです。NTTグループの最大の強みは、常に革新的な技術を取り込んで、お客様にサービスとして提供し続けていることです。したがって、技術革新をNTTグループに継続的に提供し続けることが、NTT研究所の大きな役割です。特に、技術力を強みとするNTTグループがゴーイングコンサーン、持続的発展を続けるためには、将来を見据えたR&Dは不可欠です。例えば、NTTグループの基盤設備であるネットワークは、一朝一夕にできるものではなく、しかも設備更改のターンアラウンドタイムは非常に長いという特徴があり

ます。一度導入した設備は10～20年間は持続的に使い続けなければなりません。その意味でも、先を見た技術開発、研究開発が必要です。しかし私自身、NTTデータ先端技術



日本電信電話株式会社
NTT情報流通基盤総合研究所
所長 三宅 功氏

の社長を務めた際に痛切に感じたのは、目先の収益を考えると、先を見た投資に関する意思決定は、なかなか難しいということでした。幸いにもNTT研究所は、NTTグループの強力なバックアップのもとで、ロングタームで研究開発を行える環境にあります。その面でも、5年先、10年先を見据えた研究開発をしっかりとやり続けることが重要です。

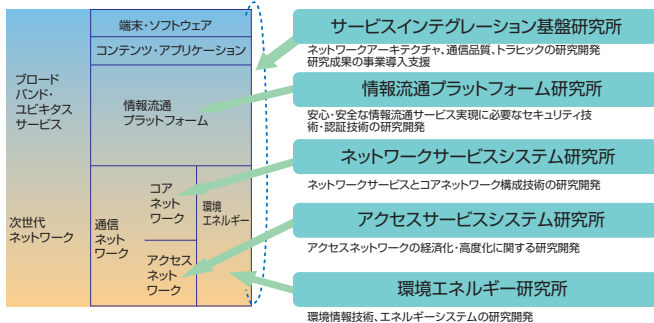
現状の課題解決に加え、将来を見据えたR&D活動に注力

——そのためには、何が必要だとお考えですか。

三宅 世の中やNTTグループの経営など、ビジネスを取り巻く環境の変化を取り込みながら、自ら先を見て将来の課題・問題を発掘し、R&Dの計画を立てるといった面を強化する必要があると考えています。所員の多くは、問題を解決する能力は非常に高いものの、将来を見

情報流通基盤総合研究所(情流総研)

NTTグループの情報流通ネットワークサービスの創出



NTT情報流通基盤総合研究所の構成

据えた課題・問題設定の能力は必ずしも高いとはいえません。この点を変えたいと思っています。具体的には、R&D成果の最初の出口である事業会社の方々と日常的に緊密なコミュニケーションを図り、事業会社が現在抱える課題に対して答を出すことは当然ですが、それだけではなく将来の課題を先取りする努力も必要だと考えています。その際に重要なのは、5年先、10年先に花開く技術というのは現実の問題に答えられなければ意味がないということです。最先端の技術開発のシーズ、トップデータを提供することで世の中への貢献を目指す基礎研究のような分野は別にして、実用化研究の領域では、現実の問題の裏側にどのような本質的な問題が内在しているかを知る、あるいは経験することが重要です。こういうマインドの醸成を研究所所員に促したいと思っています。

——具体的にどのような取組みを行っていますか。

三宅 具体例は沢山ありますが、一例としてクラウドへの取組みがあげられます。現在、NTTの全研究所を対象にオフィス環境のクラウドサービスを提供する取組みを行っています。自らIAサーバによるサーバファームを構築し、仮想化技術にとどまらず、アプリケーション開発環境の共通化、運用監視技術など、クラウド環境実現にあたっての現実的な課題解決の実験台として取り組んでいます。こういった現実の問題に取り組みながら、本当に必要な将来

の課題・問題設定を行うという営みを積極的に行うようにしていきたいと考えています。

——各論では、かなり先を見た取組みをご紹介しますが、こういった将来に向けた弾込めも重要……。

三宅 例えば、FTTHの研究は30年以上前から継続して行っており、当然技術も進化しています。この蓄積が現在、NTTグループの事業に大きく貢献できているというのがポイントで、こういう弾をいくつも仕込むことが重要だと思います。こういった弾込めをマネジメントレベルでしっかりと行うとともに、研究所員一人ひとりが、目の前の現実の問題解決を図りながら、先を見た技術開発に取り組むといった視点でR&D活動を展開する組織にしていきたいと考えています。

R&Dのグローバル化にも対応

——現状の課題を踏まえた将来の技術開発ということで、事業と独立してNTT研究所のR&Dがあるわけではない……。

三宅 事業会社が抱える具体的な課題に基づいて、先を見た課題・問題設定を行い、それにどう取り組むかということから自らプランニングできる組織にしていく必要があります。その意味では、事業会社だけでなく、もっと視野を広げる必要があると考えています。特にグローバルという観点では、米国西海岸のベンチャーに始まって、技術のシーズの出方が激変しており、ビジネスと直結した

技術開発が主流となっています。私自身、現在、ドイツの国立フ라운ホーファー研究所のアドバイザーボードメンバーを務めていますが、この研究所は国からの資金は約6割で、残りは民間企業からの資金提供です。世界中の著明なICT関連企業が、こういった研究機関とのコラボレーションを通じて、技術インキュベーションについて必死で考えています。こういった方法を学んでいく必要があると思います。また、オフショア開発を含め、R&Dリソースをグローバルの視点でどのように考えるかという点と、NTTグループがグローバル化を加速するにあたって必要なR&Dはどうあるべきかを考える必要があると思います。

記念碑に刻まれた NTT R&Dの魂

——最後に、若手研究者へのメッセージをお願いいたします。

三宅 NTT武蔵野R&Dセンタ本館内に、1950年に建立された「知の泉を汲んで研究し、実用化により世に恵みを具体的に提供しよう」と刻まれた記念碑があります。初代電気通信研究所吉田五郎所長によるこの言葉は、NTT R&Dの魂であり、60年後の現在も変わりません。NTT研究所の存在意義は、正にこの言葉にあります。NTT R&DのDNAともいえるこの言葉を常に肝に銘じて、取り組んで欲しいと思います。

——本日は有難うございました。

(聞き手・構成：編集長 河西義人)